

第二言語における副詞の使用：  
日英語学習者コーパスを用いた多角的分析から見えること

**ワークショップの構成**

- 企画者・司会者：朴 秀娟(神戸大学)
- 発表者：朴 秀娟・吉成 祐子(岐阜大学)・眞野 美穂(大阪大学)
- コメンテーター：砂川 有里子(筑波大学名誉教授・国立国語研究所客員教授)

[1] 趣旨説明 朴 秀娟

[2] 口頭発表

発表① 朴 秀娟

「日本語学習者による話し手の評価・感情を表す副詞の産出：  
習熟度別にみた叙法副詞の使用傾向の分析」

発表② 吉成 祐子

「日本語学習者による様態を表すための副詞の産出：  
学習者の母語と第二言語での移動・状態の描写における副詞的要素の比較分析」

発表③ 眞野 美穂

「英語学習者の副詞使用の特徴：日本語学習者の特徴との比較」

[3] 休憩および全体ディスカッションの準備

[4] コメンテーターによるコメント

[5] 全体ディスカッションおよびまとめ

### 1. ワークショップの趣旨

第二言語教育において、副詞は、語彙として導入されるに留まることが多く、特段取り立てて指導されることは少ない。日英語において副詞は、動詞(や形容詞)とは異なり活用しないこと、また、文の骨格を成す主語や述語というよりも、主に出来事などを詳しく述べるための修飾語となり、文中での機能が副次的であることに起因すると思われる。しかし、副詞は軽視して良い要素ではなく、学習者にとっても副詞の習得は必ずしも容易ではない。第二言語教育や第二言語習得に関する研究において副詞に焦点を当てた研究が少なからず見られるものの、これまでの研究は、習得が難しい個々の副詞を対象に意味・機能を記述したり、学習者の使用傾向を分析したりするなど、特定の目標言語における特定の副詞使用や習得に焦点を当てるが多かった。そのため、第二言語における副詞の使用で見られる一般的な特徴について論じるには、研究成果が未だ個別的・限定的であり、部分的な側面しか見えていないのが現状だと考えられる。

そこで、本ワークショップでは、個々の副詞を対象とするのではなく、特定のグループに属する副詞全般を対象とし、目標言語での使用傾向だけでなく、学習者の母語での使用や異なる目標言語での使用にも注目した考察を行う。より多角的な視点から学習者の副詞使用について考察を行い、これらの結果を総合することで、第二言語における副詞の習得一般に見られる傾向について探ってみたい。

## 2. 各発表の概要および狙い

本ワークショップでは、まず、日本語学習者を対象に、目標言語での使用傾向を習熟度別に考察を行った研究(発表①)と、学習者の母語での使用にも注目した研究(発表②)の2つを提示する。そして、発表①と発表②の結果を踏まえ、その考察が他の目標言語の習得にも見られるのか、英語学習者による副詞の使用傾向について検討する(発表③)。調査に用いた学習者コーパスは、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス(International Corpus of Japanese as a Second Language)」(発表①・②)と ICNALE (The International Corpus Network of Asian Learners of English) (発表③)である(各コーパスの詳細については、迫田ほか編(2020)、Ishikawa(2023)を参照されたい)。各発表の概要および狙いは以下のとおりである。

発表①では、日本語学習者の「叙法副詞」(工藤 1982)の習得過程に注目し、叙法副詞の産出に見られる特徴を示す。習熟度別に考察を加えることで、産出されやすいものと産出されにくいものが抽出できることを示し、叙法副詞の産出の難易度に関わっていると思われる要因を探る。中でも、話し手の評価・感情を表す副詞の産出が難しい傾向にあることを指摘する。

発表②では、日本語学習者の様態を表すための副詞使用について、母語の影響に注目した分析を行う。移動や状態を描写する際の表現に対して、様態概念の表示頻度や表示方法を検証する。日本語の母語話者・学習者の産出傾向だけでなく、日本語学習者の母語での産出傾向を比較することにより、事象の言語化における母語の影響を明らかにする。また、様態を表すための副詞使用には日本語学習者共通の特徴があることを指摘する。

発表③では、日本語学習者における発表①、②で観察された特徴が、英語学習の際にも観察されるのかを探る。英語学習者の評価副詞の使用および使用される副詞の傾向に着目し、2つの異なる目標言語の学習者の表現に見られる特徴を多角的に比較することで、母語の影響なのか、学習者特有の特徴なのかを検討する。また、課題の違いによって生じる差異、異なる学習者コーパスを比較する際の問題についても指摘する。

これらの発表を通して、学習者の副詞使用を多角的に分析・考察することにより、目標言語や母語に関わらず見られる第二言語学習者に共通の特徴、および目標言語や母語による差異が明らかにできる可能性があることを示したい。そして、その後のコメンテーターとフロアとのディスカッションを通し、第二言語習得についての議論を深めていく。

また、本ワークショップでは、以下に示すような、分析の過程で明らかになった、学習者コーパスを用いた多角的な分析・考察における課題についても指摘する。

- ・「副詞」としてタグづけされているものが必ずしも対象としたい副詞であるとは限らない(発表①③)。
- ・同様の調査方法を採用しても、目標言語や課題の詳細が異なると、結果が異なる場合がある(発表①②③)。
- ・学習者の特徴には複数の要因が影響している可能性があり、一部の表現や一部の目標言語のデータを観察するだけでは要因の解明が不十分になることがある(発表②③)。
- ・複数の要因にわけて分析しようとすると、対象数が小さくなることもある(発表①②③)。

## 引用文献

- Ishikawa, Shin'ichiro (2023) *The ICNALE Guide: An introduction to a learner corpus study on Asian learners' L2 English*. Routledge.
- 工藤浩(1982)「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『研究報告集』3: 45-92. 国立国語研究所.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬(編)(2020)『日本語学習者コーパス I-JAS 入門—研究・教育にどう使うか』くろしお出版.

付記 本ワークショップは、JSPS 科研費 22K00638、21K00761 の助成を受けたものである。